

「震災と地域再生」

担当教員名 西城戸誠・杉戸信彦・高橋五月

コース概要

日程	2017年9月1日～4日
場所	宮城県石巻市、仙台市
参加人数	30名

内容

*本フィールドスタディの経緯と目的

2011年3月に発生した東日本大震災による津波によって、宮城県石巻市は大きな被害を受けました。法政大学人間環境学部では、震災直後からNPO法人パルシックと協働して、石巻市市街地や北上町における震災ボランティアを実施してきました。2016年度からは、石巻市を舞台として、震災復興の現場と地域再生にかかわるさまざまな試みを訪問し、また地域住民から、復興の現在の話の伺うことで、「復興とは何か」「復興支援とは何か」を考えていくプログラムを開始しました。

*行程について

1日目：石巻駅前に集合した後、石巻魚市場を訪問し、石巻魚市場社長の須能邦雄さんからお話を伺いました。震災直後の対応や、震災前よりも進化した石巻魚市場を建設するための工夫についての話がありました。震災によって失ったものも多いですが、震災後、仮設の魚市場で働く漁師の団結力によって3年あまりで魚市場の復興がなされたことを学びました。続いて、NPO法人みらいサポート石巻の方から、石巻市を中心とした復興支援の過程について伺いました。また、みらいサポート石巻による支援活動と、東日本大震災における支援活動と国際協力支援や熊本地震に対する支援と比較しながら、震災支援のあり方を考えました。続けて、みらいサポート石巻による「防災まちあるき」のプログラムに参加し、震災直後の写真などを記録したタブレットを持ちながら、街歩きをしました。

2日目：前日同様に、みらいサポート石巻のアテンドで、津波被害があった沿岸部に行き、震災語り部の方お二人から、震災当時の様子について歩きながら話を伺いました。その後、防災ワークショップに参加し、ゲーム形式で震災が起きた時の対応に関してグループ別で学びました。さらに、ピースポートセンターいしのまきの方から、漁業支援プロジェクト「イマココプロジェクト」の説明を受けました。この2日間での学習では、津波被災地の記憶をどのように伝えていくのか、震災伝承のあり方を考えることになりました。

その後、北上町に移動し、宿泊先の追分温泉での豪華な夕食後、追分温泉のご主人から震災当初から、現在に至るまでの経緯と、震災後の観光のあり方に関するレクチャーを受けました。

コースのねらい

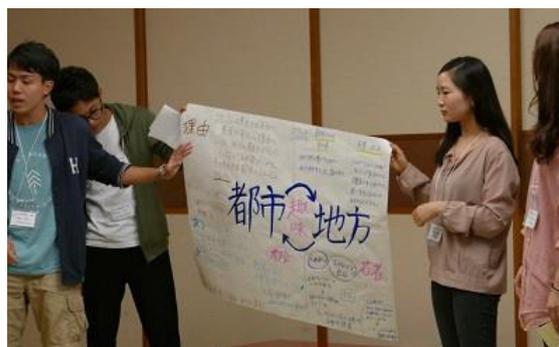
津波被災地である石巻市の市街地と半島部の双方を訪問し、震災からの地域再生、復興の現状と今後の課題についての理解を深める。



みやぎ連携復興センターからの講義



震災まちあるき



振り返りと発表会

3日目：午前中は、3人の方のお話を伺いました。一人目は地元で農業をされている今野力也さん、二人目は集団高台移転地におけるまちづくりの活動を担ってきた鈴木昭子さん、三人目は北上地区の復興活動を行っているウィアーワン北上の成田昌子さんです。今野さんと鈴木さんについては、事前学習で用いたテキスト『震災と地域再生』の聞き書きの内容に加えて、その後の様子についてお話をいただきました。成田さんからは、ウィアーワン北上のこれまでの活動と今後の展望についてのお話がありました。昼食後、復興まちづくり情報交流館北上館、にっこりサンパーク（高台移転地）を通過しながら、大室地区に移動し、漁業の手伝い（網の清掃）をし、地元の方と一緒にバーベキューを行い、交流をしました。ここで数多くの地域の方と、参加学生たちはさまざまな話を伺いました。



漁業体験

4日目：午前中は3日間のフィールドスタディの振り返りを行いました。仙台に移動後、みやぎ連携復興センターにて、宮城県全体の震災復興のプロセス、宮城県の復興応援隊など、復興支援の担い手やその制度に関する講義を受け、これまで訪問したさまざまな支援活動、団体について総括する視点を学びました。

以上の4日間のフィールドスタディによって、私たちは、震災を伝えることや復興支援の意義と課題、さらに震災後の地域再生のための課題について、さまざまな観点から考えることになりました。

学習を終えて

私は2年連続で石巻FSに参加させていただきました。東日本大震災発生から年月が経ち、今の被災地は怎么样了かという思いから石巻を訪れ、そこに住んでいる方や復興のために積極的に活動しているNPO、行政やNPO、住民の間で支援をしている機関など多方面の方々のお話を聞くことができ、復興を様々な観点から考えることができました。また2年連続で参加したことで、昨年と比較して見ることができ、初めて参加した年は未だに復興は完了しておらず本当の復興はまだまだ先にあることを感じましたが、1年置いて再び訪れると少しずつ復興は前進しており伝承や外部との関わりなどにも目を向けるように変化していることを実感することができました。（2年・広瀬結）

現地に行く意味とは「文献では得られ切れない実態を五感を通して体験する」ということだと思ふ。石巻北上FSに参加し、その意味を肌で感じた。事前学習では聞き書きに関する文献を読んでいたため、地域が抱える問題や取り組みについてある程度は理解していた。が、もちろんのことながら文献に載っている聞き書きは地域の方全員のものではない。震災で何を失い、何を思い、何をもちて復興とするかは人それぞれ違う。現地で多くの方の声を聞くことで、何を思い何が望まれているかを自分なりに理解することができた。机上の資料からはある程度の知識は得られる。だがそれが全てではないということを実地に赴くことで初めて知ることができた。（2年・守屋瑞穂）



石巻市内での震災まちあるき



震災の現地の様子を学ぶ

石巻魚市場の訪問

